

総合的な学習の時間における「協働」を見取る視点の活用

～「見極める・創造する」姿を生み出す発問に着目して～

藤上 真弓

The Use of Perspectives that Capture the “Collaboration” in the Period for Integrated Studies:
Focus on the Questioning to Creating a figure of “Discernment/Creation”

FUJIKAMI Mayumi
(Received JULY 31, 2024)

キーワード：協働、教室談話、見取り、教師教育

はじめに

総合的な学習の時間（以降、「総合」と表記）の学びにおいて、「探究」「協働」（文部科学省、2018、p. 8）はキーワードとなっているが、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会生活・総合的な学習の時間ワーキンググループ（2016）により、「探究のプロセスを意識することは広まってきているが、探究のプロセスの中でも『整理・分析』『まとめ・表現』に対する取り組みが十分ではないという課題」が指摘されている。「整理・分析」「まとめ・表現」の過程においては、他者との「協働」の場面が数多く設定されるが、場の共有だけになってしまったり、「物事の本質を探って見極めようとする一連の営み」（文部科学省、2018、p. 9）を共にしていくような場になっていかなかったりしている取組もあるということが言えるであろう。「総合」の話し合いにおける課題については、これまでも渡邊・岡本（2006）が、「多くの教師は、曖昧な『体験活動』や『体験学習』に視点を奪われ、そこでの内容的な充実や計画性ばかりを重視し、『一緒に何かを協力して取り組ませれば、生きる力の獲得につながる』と思い込んでしまっているのではないだろうか」（p. 2）と指摘しているが、2018年時点においてもこの課題は解決されていない状況にあった。

そこで、藤上（2023）の研究において、「総合」が抱える話し合いについての課題を解決する糸口を見いだすために、「総合」における「協働（話し合い）」の質を見取る視点を提案した。その視点とは、「仲間と向き合う『つながる』姿」「仲間と共に課題と向き合う『見極める・創造する』」（p. 79）の2つである。この2つの視点を授業の具体的な場面で活用していくことができるように、「つながる」姿を見取る具体的な視点として、「①双方向性」「②共通性・差異性」「③共感性・誠実性」「④論理性」「⑤具体性」（p. 86）を提案した。また、「見極める・創造する」姿を見取る具体的な視点として、「A独創性」「B柔軟性」「C主体性」「D整合性」「E鋭角性」「F広角性」「G方向性」「H調和性」（pp. 89-90）を提案した。この藤上（2023）の研究をもとにして、藤上（2024）においては、「つながる」姿をより子どもたちの姿をイメージしやすいと考えた「分かり合おうとする」姿と表現を変え、研究を進めてきた。その研究の中で、クラスメイトとともに課題解決に向けて「見極める・創造する」姿を生み出す基盤となり、「総合」の授業以外でも活用できる視点である「分かり合おうとする」姿を子どもが用いる言葉レベルで具体化した。そこで、今後は、「総合」の「協働（話し合い）」場面において、「物事の本質を探って見極めようとする一連の営み」（文部科学省、2018、p. 9）を共に行っていく「見極める・創造する」姿について、より具体的にとらえていきたい。そうすることで、提案した視点を教師の授業づくりにつなげる手がかりを見いだすことができ、「総合」における話し合いが抱えてきた課題を解決する一歩となっていくのではないかと考えた。

1. 研究の目的と方法

本稿では、「総合」の1単位時間のねらいを達成するための鍵を握り、「総合」における質の高い話し合いとなっていく藤上（2023）で提案した「見極める・創造する」姿を生み出す発問について検討し、具体的な視点に照らし合わせて発問例を提案していくことを目的とする。

藤上（2023）において、秋田（2012）の教室談話や石井（2004）の学び合う学び、Mercer（2008）の三種類の会話、丸野（2005）のディスカッションスキルの理想的な発達段階に関わる研究、山本・若松・若松（2020）が用いたBatson（2011）の「向社会的動機の多元性」、五十嵐・丸野（2008）の教室談話における発言のつながりをとらえる研究等の先行研究をもとにした理論的研究と、総合的な学習の時間における先進的な実践を分析して得た知見をもとに、「総合」で目指す談話の発展的段階について整理した。目指す段階を4段階目として「4段階目：協働」「3段階目：協働的」「2段階目：プレゼンテーション的」「1段階目：無目的」（藤上、2023、p.83）と4段階で示した。

本稿で、なぜ発問例を提案することを研究の目的にしたかという、4段階目の「協働」は、子どもたちだけで本質的な談話を展開していくことができる段階として設定しており、その段階に至るには、3段階目において教師の適切なコーディネートのもとで、本質的な談話についての概念とそれを実現する方略を子どもたちが手に入れていくことが重要であると考えているからである。設定した「協働（話し合い）」の場を本来の「協働」に誘っていくための発問を、教師が適切に行っていくことが重要であり、その場の中で子どもたちは、「総合が目指す『協働（話し合い）』とはどのようなものであるのか」「そのような『協働（話し合い）』にしていくためにはどのような方略が有効なのか」等ということを具体的にとらえることができるようになっていく。その積み重ねにより、徐々に、その役割を子ども自身がしていくことができれば、提案した4段階目の姿が具現化されていくと考えているからである。

そこで、本稿では、藤上（2023）で提案した「見極める・創造する」姿を見取る8つの視点ごとに示した「子どもの具体的な姿の例」に対応して、その姿を生み出すために必要であると考えられる発問を例示するという方法で研究を進めていく。向き合う探究課題が多岐にわたる「総合」においては、それらの発問は例示であって、実際に取り組む単元に応じてより具体的な言葉に置き換えて活用していくことを想定し、より汎用性のある例を示すこととする。

2. 研究の実際

ここでは、A～Fの「見極める・創造する」8つの視点で定義している姿をさらに具体的に示した「子どもの具体的な姿の例」を生み出す発問例について整理する。

2-1 「A独創性」を発揮する姿を生み出す発問例

「A独創性」は、「自分たちで新たな考えや方法等を生み出そうとしている」（藤上、2023、p.90）姿と定義している。課題解決に向かって最適解を導出する際には、「これまでの考えや方法を加工したり新たなものを生み出したりする姿」（藤上、2023、p.90）が求められる。自分たちオリジナルな考えを生み出したり、対象の独自性・特殊性等を見極めたり生かしたりする姿を求めていくことが、『OECD Learning Compass Concept Notes』で示されたコンピテンシーの1つである「新たな価値を創造する力」（白井、2020、p.146）にもつながっていく。表1は、「A独創性」を発揮する子どもの具体的な姿の例と、その姿を生み出すための発問例である。

表1 「A独創性」を発揮する子どもの具体的な姿の例と、その姿を生み出すための発問例

A独創性	自分たちで新たな考えや方法等を生み出そうとしている
子どもの具体的な姿の例	左記の姿を生み出す発問例
ア. 自分たちオリジナルな考えを生み出そうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・（～をしてきた・～を見いだしてきた等）みなさんだからこそ生み出せる考えはどのようなものになるか ・この案のオリジナリティーがある部分はどこか ・○グループの案のウリは伝わってきたか ・オリジナリティーという点でこの案を分析すると、☆5つで考えるといくつ分と考えるか
イ. 自分たちの（地域等）だからこそできる考えや方法等を生み出そう	<ul style="list-style-type: none"> ・地域独自の特色を生かすとしたらどのような考えになるか ・地域独自の魅力を生かすとしたら、どのような方法があるか

とする	
ウ. 自分たちの取組が独自に社会に及ぼす意味や価値を考えながら、語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・他の取組とは違って、自分たちの取組は地域にどのような影響を与えると考えるか
エ. 対象がもつ独自性・特殊性を顕在化し、それらを生かす考えや方法等を生み出そうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・○だけがもつ魅力（独自性・特殊性）には、どのようなものがあるか ・一般の○にはない△のよさ（魅力・特徴等）とは何か ・○だけがもつ魅力（独自性・特殊性）を生かすとする、どのような方法があるか ・○の独自性（特殊性）の中でも、どこに焦点を絞って取組を進めていくのか

(藤上、2023、p. 90 をもとに新たに作成)

2-2 「B柔軟性」を発揮する姿を生み出すための発問例

「B柔軟性」は、「自分の考えにこだわるだけでなく柔軟性を持ち、課題解決にふさわしい考えを取り入れようとしている」(藤上、2023、p. 90) 姿と定義している。新たな価値を生み出すには、自分や自分たちの考えにこだわる姿も必要ではあるが、他者と考えを擦り合わせてさらによりよいものに改変し続けようとする柔軟性のある姿勢が求められる。表2は、「B柔軟性」を発揮する子どもの具体的な姿の例と、その姿を生み出すための発問例である。

表2 「B柔軟性」を発揮する子どもの具体的な姿の例と、その姿を生み出すための発問例

B柔軟性	自分の考えにこだわるだけでなく柔軟性を持ち、課題解決にふさわしい考えを取り入れようとしている
子どもの具体的な姿の例	左記の姿を生み出す発問例
ア. 新しい方法やアイデア等を試す提案をしたり、共にどんどん新しい方法やアイデアを試したりしながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・違う方法を試してみるとしたら、どのようなものがあるか ・これまで考えてきた方法だけでなく、他にも試してみたい方法はないか ・これまで自分たちが見つけてきた方法や考えだけが、～を実現するための方法なのだろうか
イ. アプローチの方法を柔軟に変えながら検討しようとする	<ul style="list-style-type: none"> ・他にアプローチの方法はないのだろうか ・～を実現するには、その方法しかないか ・思い付くアプローチ方法を、できるだけたくさん挙げるとすると、どのようなものがあるか
ウ. 互いにこだわりを捨てる勇気をもって語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・～にこだわらないと、自分たちの思いや願いは実現しないのか ・そこにこだわらないと目的は達成できないのか
エ. 準備した考えもあるが、議論の進行状況を見て、必要であると考えた考えを選んだり、生み出したりしながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・ここまでの話し合いの流れの中で、「この考えでやっぱりよかったな」「ここは変えたいな」等というところはなかったか ・これまでの話し合いで共有したことをもとにすると、これまでの考えや方法で変えたいと思う部分はあるか
オ. 準備した自分の考えに留まらず、自分の考えを更新しながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・ここまでの感じたこと、気付いたこと、考えたこと等をもとに、自分の考えを整理すると、どのようなものになるか ・～さんの気付きをもとに考えを更新するとしたら、どのようになるか
カ. 今感じたこと、気付いたこと、考えたこと等を言葉にして語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでもらった気付きをもとに、自分たちの案をもっとよくするとしたら、どのようにしたいか ・今の自分の考えを自分の言葉で説明すると、どのようになるか

(藤上、2023、p. 90 をもとに新たに作成)

2-3 「C主体性」を発揮する姿を生み出す発問例

「C主体性」は、「自分たちにとって関わりの深い課題であることを意識し、自分たちの力で課題解決しようとしている」(藤上、2023、p. 90) 姿と定義している。『OECD Learning Compass Concept Notes』で示されたコンピテンシーの1つに「エージェンシー」(白井、2020、p. 146) が挙げられているが、『OECD Learning Compass 2030 仮訳』の註によると、『OECD (2018) のポジション・ペーパーによると、「エージェンシー」は、社会参画を通じて人々や物事、環境がよりよいものになるように影響を与えるという責任感を持っていることを含意する』とあります。これは新学習指導要領で示されている主体性に近い概念ですが、より広い概念と考えられます(秋田ら、2020、p. 5) とある。「C主体性」の視点も、「総合」において求められる真正な課題に対して自分(自分たちなり)に「レスポンシビリティ(応答責任)」を果たしていこうとする姿を見取るものであることから、ポジション・ペーパーで示された概念に近い。表3は、「C

主体性」を發揮する子どもの具体的な姿の例と、その姿を生み出すための発問例である。

表3 「C主体性」を發揮する子どもの具体的な姿の例と、その姿を生み出すための発問例

C主体性	自分たちにとって関わりの深い課題であることを意識し、自分たちの力で課題解決しようとしている
子どもの具体的な姿の例	左記の姿を生み出す発問例
ア. 必要感や切実感をもとに語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・このデータを見て、「まずいぞ」と感じたことは何か ・これらのデータを見て、自分たちは何をしていく必要があると考えたか ・自分たちが実現したいことと今の状況とのズレを、どのようになくしていきたいか
イ. 自分たちの思いや願いを確認し合いながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちが実現したいと考えていることは何だったか
ウ. 可能性を探りながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちで取り組んでいけそうなところはどの部分か ・自分たちで変えていけそうなところはどの部分か ・～すると面白くなりそうだと感じる部分はどこか
エ. 自分たちの取組が社会に及ぼす意味や価値を考えながら、語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・みなさんが地域で～するという事は、どのような意味があると考えるか ・みなさんが動き出すことで、どのような影響が地域に及ぼされると考えるか
オ. 他者を巻き込みながら、自分たちの取組を広げるために必要なことについて、探りながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの取組に共感してくれそうなのは、どの立場（年齢層や地域、機関、～という意識をもっている等）の人々か ・自分たちの取組を理解してもらうために必要なポイントは何か
カ. なかなか適切なアイデアが見いだせなくても、粘り強く語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いに行き詰まっている状況をどのように打破していくか ・～を解決するためのアイデアが出なくなってきたが、これからどのようにしていくとよいと考えるか
キ. 必要であると考えた人材や学外機関等に、協力や連携等を求める可能性も探りながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの思いや願いを実現するために、誰に（どのような年齢層や機関、人物等）協力をお願いしていくとよいか ・自分たちの取組と一緒に進めてくれそうなのは、誰（どのような年齢層や機関、人物等）か
ク. 自分とは異なる考えや立場の人々の考えを求めながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちだけの考えで、結論を出してよいか ・自分たちの取組をよりよいものにしていくためには、誰（どのような年齢層や機関、人物等）に意見をもらおうとよいか

(藤上、2023、p.90 をもとに新たに作成)

2-4 「D整合性」を發揮する姿を生み出す発問例

「D整合性」は、「課題解決の視点や方法等に矛盾が生じないように、目的を意識し、整合性をとろうとしている」(藤上、2023、p.90) 姿と定義している。子どもたちなりの課題を設定した後は、子どもたちには、常に目的との整合性を意識して探究を進めていくことの重要性に気付かせていきたい。目的を意識していなかったり、見失ってしまったたりしては、課題解決のための「協働（話し合い）」も本質的になっていかない。そのためにも、適宜、目的を意識したり、より具体化したり、生じた問題に応じて目的を変更したりすること等を促すような発問が必要である。表4は、「D整合性」を發揮する子どもの具体的な姿の例と、その姿を生み出すための発問例である。

表4 「D整合性」を發揮する子どもの具体的な姿の例と、その姿を生み出すための発問例

D整合性	課題解決の視点や方法等に矛盾が生じないように、目的を意識し、整合性をとろうとしている
子どもの具体的な姿の例	左記の姿を生み出す発問例
ア. 適宜、目的を確認しながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの目的に合った話し合いになっているか ・自分たちの目的と矛盾した方法になっていないか ・自分たちの目的はどのようなものだったか ・目的を見直す必要はないか
イ. 対象や目的に照らし合わせて、納得できない考えや方法、それを生み出した理由がある場合には、質問したり、確認したりしながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・目的に合った考えになっているか ・関わっていく対象に合った方法になっているか ・目的に照らし合わせて、この理由に納得できるか

ウ. なぜこの事例が根拠になり得るのかということを考えながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜこの事例が根拠になるのか ・なぜこれが根拠と言えるのか
エ. なぜそのように主張したり、結論を導き出したりできるのか、考えながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・このような考えを導き出した根拠は何か ・このような結論になった理由は何か
オ. 自分と他者の思いや願いとみなどで取り組む課題とのつながりを意識しながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの思いや願いに合ったためあてになっているか ・そのプロジェクトに取り組むことで、自分たちが解決したい問題は解消できるのか
カ. 共通の目的と自分たちのグループの取組の目的とを照らし合わせながら、つながりを意識して語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・学級全体で解決していきたいことと、グループの取組に矛盾はないか
キ. 目的を具体化し、見通しをもちながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的に「誰に（対象）」「何のために（目的）」「どのように（方法）」、プロジェクトを進めていくのか ・誰（どのような立場や考え方、意識をもっている人）の意識や行動等をどのように変えていきたいのか
ク. 目的に照らし合わせて、必要性や重要性、優先順位等について検討し合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・目的に照らし合わせると、一番伝えたいことは何か ・目的に照らし合わせると、まず何から取り組むか ・目的に照らし合わせて、優先順位（重要度）が高い方法はどれか ・目的に照らし合わせて、すぐに解決する必要があるのはどの問題か ・どのような流れで解決していく必要があるか ・課題を解決するために乗り越えなくてはならない壁には、どのようなものがあるか
ケ. 目的に照らし合わせて、必要な情報を適切に補完しながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・～という目的に照らし合わせてみると、もっと必要な情報はないか ・～という目的に照らし合わせてみると、情報に不足はないか
コ. 自分の思いや願い、考えに合った表現を模索しながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・自分（たち）が伝えたいことに合った表現になっているか ・目的に合った表現になっている度合いはどの程度か

(藤上、2023、p. 90 をもとに新たに作成)

2-5 「E 鋭角性」を発揮する姿を生み出す発問例

「E 鋭角性」は、「議論を焦点化し、深く掘り下げて検討しようとしている」（藤上、2023、pp. 90-91）姿と定義している。「D 整合性」とも関連するが、「E 鋭角性」を発揮している姿は、目的を具体化しているからこそ生まれる姿であると考えている。目的を具体化、明確化しているからこそ、子どもたちはそれを成し遂げるために、その時にまずは考えていかねばならぬことを深く掘り下げて検討しようとしていく。しかし、どのように焦点化して検討していったらよいのか経験値によってはイメージできないため、教師の発問によってそのような姿を生み出していく必要がある。表5は、「E 鋭角性」を発揮する子どもの具体的な姿の例と、その姿を生み出すための発問例である。

表5 「E 鋭角性」を発揮する子どもの具体的な姿の例と、その姿を生み出すための発問例

E 鋭角性	議論を焦点化し、深く掘り下げて検討しようとしている
子どもの具体的な姿の例	左記の姿を生み出す発問例
ア. 対象や課題の特殊性・個別性・独自性に焦点化し、それらに照らし合わせて語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・一人ひとりに合った方法とは、どのようなものか ・～の独自性（特殊性・個別性）を生かす方法（考え）になっているか ・～という独自性（特殊性・個別性）に着目すると、どのようなプロジェクトを進めていく必要があるか
イ. 対象や課題の特徴を明確化しながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・～の特徴はどのようなものか ・～の特徴に合った方法になっているか ・～という特徴に合った方法になっているか
ウ. 対象や課題に関わる客観的データをもとに課題を焦点化しながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・これらの（客観的な）データをもとにすると、何に焦点化して取組を行っていく必要があると考えるか
エ. 対象や考え等が抱える問題に焦点化して語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・～のどこに問題があるのか ・～の何を伝えていきたいのか ・対象が抱えている問題に対応した取組になっているか ・取組のアイデアのどこに問題があるのか ・プロジェクトのどのような点に問題があったのか

オ. 対象のニーズをもとに語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・関わる対象の求めはどのようなものであるのか ・関わる対象の求めに合った提案になっているか ・人に押しつけない方法とはどのようなものか
カ. 必要性・重要性の度合いを検討しながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・必要度が高い方法や考えはどれか ・重要性の度合いが高い考えはどれか
キ. 概念の階層（具体と抽象）を意識しながら、語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・みなさんは「(例) 地域を盛り上げる」と言っているが、「盛り上げる」とは具体的に地域がどのようになっていることを言うのか ・「(例) みんなにやさしい施設になるために」という目的で活動しているが、「みんな」とは誰を指すのか ・「(例) ○市に来る観光客を増やす」という目的を掲げているが、「ターゲット」は誰なのか

(藤上、2023、pp. 90-91 をもとに新たに作成)

2-6 「F 広角性」を発揮する姿を生み出す発問例

「F 広角性」は、「幅広い可能性を視野に入れ、多様な視点から検討しようとしている」(藤上、2023、p. 91) 姿と定義している。「F 広角性」を発揮している姿も、「D 整合性」と関連していると考えている。「F 広角性」を発揮している姿も、目的を意識できているからこそ生まれる姿であると考えている。ただ、掘り下げて検討していく「E 鋭角性」とは違って「F 広角性」は、多様な視点から課題解決に向かって検討せざるを得ない状況の時に発揮していくものである。自分たちで多様な視点を生み出していくことができない段階の子どもたちであったら、子どもたちに自分たちの視野の狭さに気付かせたり、視野を広げたりしていく発問をしていく必要がある。表6は、「F 広角性」を発揮する子どもの具体的な姿の例と、その姿を生み出すための発問例である。

表6 「F 広角性」を発揮する子どもの具体的な姿の例と、その姿を生み出すための発問例

F 広角性	幅広い可能性を視野に入れ、多様な視点から検討しようとしている
子どもの具体的な姿の例	左記の姿を生み出す発問例
ア. 対象の魅力を多様な視点から顕在化し、それらに照らし合わせて語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・○、△、□という視点から、～の魅力をとらえるとどのようなものが挙げられるか ・～の魅力をどのような視点からとらえていったらよいか
イ. 対象や課題の特徴を多様な視点から顕在化し、それらに照らし合わせて語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・～の特徴を、どのような視点からとらえていく必要があるか ・目的を達成するためには、どのようなチェック項目が必要か ・目的を達成するためには、どのような視点からの検討が必要か ・対象(例: 地域の多くの立場や状況に置かれている人々)は、～に対してどのような思いや願いをもっているのか ・「みんな」とは誰を指すのか
ウ. 複数の対象や課題について、多様な視点から比較しながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・2つ(複数)の対象を○、△、□という視点で比較すると、どういったことが浮かび上がってくるか ・これらのものをどういった視点から比較していったらよいと考えるか
エ. 複数の対象や課題等を共通のもの同士でまとめ、分類しながら傾向を見いだしたり、それらの関係性をとらえたりしようとする	<ul style="list-style-type: none"> ・情報を分類すると、どのような傾向が見えてくるか ・分類した情報同士の関係を整理するとどのようなようになるか ・情報を分類すると、どのような関係性が見えてくるか
オ. 視点を移動したり、置き換えたりしながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・～さんの立場に立つと、○はどのようにとらえられるか ・～さんは、なぜ「～」とおっしゃったのか ・○という視点からこの考えや方法を検討すると、どのようなことが見えてくるか
カ. 「もしも、～だったら」と仮定して、別の状況や視点から考えながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・もしも～という状況だと仮定したら、この方法はうまくいくか ・もしも～という状況だと仮定したら、どういうことに気を付ける必要があるか ・もしも～だったら、どのように対応するか ・もしも～という視点からとらえていくと、どういったことが言えるか
キ. 自分たちの提案をメリット・デメリットの両面から検討しながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの提案には、どのようなメリットとデメリットがあるか ・メリット・デメリットという視点から、自分たちの取組を見直すとしたらどのようにしていく必要があるか
ク. 自分たちの提案のリスクについても検討しながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちが行う方法のデメリットを補う手立てを考えているか ・自分たちの提案には、どのようなリスクがあるか検討しているか ・リスクへの対応方法を考えているか ・挙げたリスクにどのように対応していくのか

ケ. 公平性・多様性の視点から検討しながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・嫌な思いを誰もがしない提案となっているか ・「みんな」とは誰を指すのか ・～の参加の仕方にはどのようなものがあるか ・様々な年齢、性別、置かれた状況等に対応しているか ・提案していく対象が置かれた様々な状況に対応しているか ・この提案は、誰もが（不特定多数がターゲットの場合）取り組めるものとなっているか
コ. 自分たちの提案によってもたらせる因果関係について検討しながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの提案はどのような因果関係をもたらすのか ・～という結果になるためには、どのような道筋があるか
サ. 必要性・重要性について多様な視点から検討しながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・○、△、□の視点から検討すると、どれが必要性（重要性）の度合いが高いか ・必要性（重要性）の度合いを、どのような視点から検討していく必要があるか
シ. 議論にふさわしい複数の根拠を示しながら、語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> 理由を3つ挙げて結論を導き出すとどのようなものになるか ・この方法で進めていく根拠を複数挙げるとするとどのようなものになるか ・～という根拠だけで結論を言い切ってよいか
ス. 自分や自分たちとは異なる考えをもつ人々や異なる立場の人々に意見を求めながら、語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・○年（○組）の考えだけで、～がよい方法であると言い切ってよいか ・自分たちの案を誰に検討してもらう必要があると考えるか

（藤上、2023、p. 91 をもとに新たに作成）

2-7 「G方向性」を発揮する姿を生み出す発問例

「G方向性」は、「仲間で共有できた点とそうでない点、浮かび上がった課題を明らかにし、追求の方向性を探っている」（藤上、2023、p. 91）姿と定義している。「協働（話し合い）」している時には、時には立ち止まり、皆で解決できたこと、納得し合えたこと、生み出したことだけでなく、互いの意見をすりあわせることができなかつたところ、うまく整理ができなかつたところ、結論付けることができなかつたところ、新たに生まれた思いや願い等を見つめ、整理し、自分たちは次に何について、どのように探究していく必要があるのか自覚していく必要がある。特に、うまくいかなかつたところや新たに生まれた思いや願いは、新たな探究のサイクルを生み出していくもととなっていくため、具体的に整理をさせていく必要がある。このようなことを行う姿が、「G方向性」を発揮している子どもの姿である。課題解決に向けて強い意志をもっていればもっているほど突き進みがちであり、自分や自分たちの探究の方向性にずれが生じていっていても気付きにくい。また、目的を達成するためには、共に取り組んでいるクラスメイトと折り合いを付けていかななくてはならないのにもかかわらず、話し合いが平行線のままとなってしまうこともある。そのような時には、教師は、次の方向性を探っていくことができるような発問をしていく必要がある。表7は、「G方向性」を発揮する子どもの具体的な姿の例と、その姿を生み出すための発問例である。

表7 「G方向性」を発揮する子どもの具体的な姿の例と、その姿を生み出すための発問例

G方向性	仲間で共有できた点とそうでない点、浮かび上がった課題を明らかにし、追求の方向性を探っている
子どもの具体的な姿の例	左記の姿を生み出す発問例
ア. 過去からの経緯をもとにしながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの追求で得たことをもとにすると、どういう調査をしていく必要があるか ・これまでの調査で～が明らかになっているが、何に取り組む必要があると考えるか
イ. 現状をもとにしながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・～が置かれた現状をもとにすると、どのような活動を行っていく必要があるか
ウ. 違和感をもつ要因を探りながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・違和感をもった部分はどこか ・違和感をもつ原因は何だったのか
エ. これまでの経験をもとに、予想や仮説を立てて語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの～の経験をもとに予想すると、どのような方法がふさわしいか ・これまでに得た地域の人々の言葉をもとに予想すると、どのような反応をされると考えるか ・これまで～に対してうまくいった方法をもとにすると、どのような仮説が立てられるか
オ. 似ているものやこれまでの傾向をもとに類推し、予想を立てな	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの～の検討で明らかになったことをもとにすると、～についてどのようなことが言えると予想するか

から語り合おうとする	・似ている～の傾向とつなげると、～にはどういう特徴が見られると予想するか
カ. 根拠に基づいた推論をもとに予想を立てながら語り合おうとする	・～という事実をもとにすると、どのようなことが予想できるか ・その推論はどのような根拠をもとに導き出したのか ・これらの推論をもとにすると、どういったことを○さん（対象）に確かめる必要があると考えるか
キ. どこに貢献できそうか、どこに手を打ったらよいか等、可能性を探りながら語り合おうとする	・これまでの話し合いをもとにすると、どういった部分で貢献できそうだと感じたか ・～をもとにすると、抱えている問題のどこに焦点を当てて取り組んでいく必要があると感じたか
ク. 矛盾やズレを顕在化しながら語り合おうとする	・～の思いや願いと照らし合わせると、どこに矛盾が生じているか ・みなさんの目的と方法にはどういったズレがあることが見えてきたか
ケ. 問題を顕在化しながら語り合おうとする	・何が今、問題になっているのか ・どのような問題が挙げられるか
コ. みなで納得できている点とそうでない点を確認しながら語り合おうとする	・みなで納得できている点と納得できていない点を整理すると、どのようになるか ・みんなの考えがまとまらなかったのは、どういったことであったか
サ. 新たに生まれた思いや願い、見方・考え方、問題意識等を見つめながら語り合おうとする	・ここまでの話し合いを通して、どのような思いや願いが生まれたか ・ここまでの追求で、どのような問題意識が生まれたか ・これから必要となるのは、どのような視点からの検討だと考えるか
シ. 学外機関や地域の人々等から協力や支援を得る可能性も探りながら語り合おうとする	・みなさんの取組の～という部分を充実させるためには、誰に（どの機関等に）協力してもらおうと効果が上がると考えるか
ス. 自分たちの思考や決定の筋道をとらえながら語り合おうとする	・どのようなきっかけでその考えに至ったのか ・誰のどのような考えに影響を受けて、そのような自分なりの結論になったのか

（藤上、2023、p. 91 をもとに新たに作成）

2-8 「H調和性」を発揮する姿を生み出す発問例

「H調和性」は、「互いの持ち味や考え等を生かしながら、仲間や現実との折り合いを付け、最適解を導出しようとしている」（藤上、2023、p. 91）姿と定義している。この姿は、藤井（2020）の定義している「異なった能力が組み合わさって新しい価値を生み出す活動」（p. 29）という「協働」と同様の意味合いをもっている。「H調和性」を発揮する姿は、「誰と」「何と」折り合いを付けていくのかということ意識した時に生まれてくる姿である。また、言葉を用いてやりとりする「協働（話し合い）」場面では、自分やグループ、クラスメイトみんなで導出した考えや方略を分かりやすい誰もが納得できるような言葉でまとめようとする姿を求めている。そのような姿を生み出していく発問をしていくことが、教師には求められる。表8は、「H調和性」を発揮する子どもの具体的な姿の例と、その姿を生み出すための発問例である。

表8 「H調和性」を発揮する子どもの具体的な姿の例と、その姿を生み出すための発問例

H調和性	互いの持ち味や考え等を生かしながら、仲間や現実との折り合いを付け、最適解を導出しようとしている
子どもの具体的な姿の例	左記の姿を生み出す発問例
ア. 相手の考えのよさを認めた上で、気付きを伝えたり、自分の考えのよさについて主張したりする	・○さん（○グループ）の案で素敵だなと思ったところと、もっと改善したらよいかと思うところはどの部分か ・他のグループの案のよさを生かしながら、気付きや自分の考えのよさを主張するときにはどのような伝え方が必要か
イ. 相手のメリットにもつなげながら、自分の考えを主張する	・他の人の取組にもつながる自分たちの取組のよさは何か ・他のグループの取組の中で、自分たちのグループの取組に効果的だと感じた方法はどのようなものか
ウ. 相手のニーズを意識しながら、自分の考えを語る	・関わる相手の求めに照らし合わせると、どの方法が一番ふさわしいか
エ. 仲間や他者の思いや願い、興味・関心、問題意識の傾向を意識して考えを語る	・これまで関わってきた人々の思いや願いをもとにすると、どのような考えを大切にしてプロジェクトを行う必要があるか ・～という問題意識をもっている対象に提案していくには、どのような方法が必要か
オ. 互いの持ち味や役割を生かしながら考えを語る	・みなさん一人ひとりの持ち味を生かした取組方にするには、どのような方法がふさわしいか ・各グループの役割を明確にするには、どのような方法をとったらよいか

カ. 自分（たち）なりの考えを整理して、キーワード化して伝える	<ul style="list-style-type: none"> ・重要であると感じた考えをキーワード化すると、どのようになるか ・○について、「○はズバリ～である」と言い切るとすると、どう表現するか ・○○のアピールポイントを3つにまとめると、どのようになるか
キ. 思い付いたことを分類したり取捨選択したりして、概念化しながら語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・思い付いた案を分類して、それぞれに「～大作戦」と名付けるとどのような解決策にまとめられるか
ク. 対象や課題の多様で複雑な関連を吟味しながら、最適解を導き出そうと語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・関わる対象が置かれた様々な状況に対応できる案はどのようなものか ・～という方法を実行するとしたら、どのような因果関係が生まれるのか
ケ. 事例や対象に関わる特徴をもとに、上位概念や共通する条件、きまりを導き出そうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・これらの事実から言えることはどのようなことか ・○と△、□に共通する条件（きまり）はどのようなことか
コ. 情報の信憑性や客観性について確かめながら、語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・～というように言い切っても問題はないか ・誰から（どこから）手に入れた情報をもとに結論を出したのか ・今手に入れている情報だけで、～と結論付けてよいか
サ. 対象に直接関わりながら得た情報（主観的なデータ）をもとに語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・誰のどのような考えをもとに導き出した結論なのか ・○さんと△さん、□さんの思いや願いをもとにすると、どのような結論が適切だと考えるか
シ. 対象や課題についての客観的なデータ（数値、表、グラフ等）をもとに語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・この（客観的な）データから言えることは何か ・これらの（客観的な）データをつなぎ合わせると、プロジェクトは何を大切にしていけないといけないと言えるか
ス. 個別のもの共通点（一般性・抽象化・価値付け）を探りながら、語り合おうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・○さんと△さん、□さんに共通していることは何か ・○さんと△さん、□さんの思いや願いの共通点を一言でまとめるとどうなるか ・地域の○に携わる人々の誰もがもっている思いや願いとは何か
セ. 公平性の視点から検討しようとする	<ul style="list-style-type: none"> ・その考えは誰にとっても当てはまることなのか ・その方法は誰にとっても同じようにメリットのあるものになっているか
ソ. 汎用性のある結論を見いだそうとしている	<ul style="list-style-type: none"> ・どの状況でも活用できる考え方とは何か
タ. 二項対立ではなく、様々な立場や状況等に応じながら、最適解を導き出そうとしている	<ul style="list-style-type: none"> ・～や～の状況にも対応した結論になっているか ・○や△の立場から見ても、結論は変わらないか
チ. 根拠を互いに求め合い、足りない部分を補い合い、最適解を導き出そうとしている	<ul style="list-style-type: none"> ・「～対象に～を実行する」と決定付けるための根拠の数は適切か ・「～対象に～を実行する」と決定するための根拠を挙げるとどのようなものになるか

（藤上、2023、p. 91 をもとに新たに作成）

3. 成果と課題

本研究の成果は、「総合」の「協働（話し合い）」を本質的にするために、どのような発問をしていくことが求められるのか、これまで藤上（2023）で提案した「協働（話し合い）」を見取る視点と関連付けて提案できたことである。「協働（話し合い）」を見取る視点や「子どもの具体的な姿の例」については、先行研究や先行実践をもとに理論と実践を往還させながら導き出してきたものであり、発問例も「子どもの具体的な姿の例」をもとにして示したものであるが、「総合」の実践研究に力を注いできた筆者の元小学校教師として経験して得たことをもとにした部分もあると考えている。そのため、この発問例は完成形ではなく、今後の理論研究や教育現場の先進的な取組をもとに、更新し続けていく必要があると考えている。

おわりに

今後は、本稿で整理した発問例を具体的に授業づくりにどのように生かしていくことができるのか、「協働（話し合い）」を見取る視点をどのように教育現場と共有していくのか等、「総合」の実践に活用できるようなツールの開発を小学校若手教師の意見も踏まえながら検討していきたい。

付記

本稿は、2024年度科学研究費補助金（基盤研究（C））（研究代表者：藤上真弓 課題番号 24K06060）に

よる研究成果の一部である。

参考文献・引用文献

- 秋田喜代美：学びの心理学 授業をデザインする，左右社，2012.
- 秋田喜代美・安彦忠彦・太田環・岸学・木村優・小村俊平・坂本篤史・下郡啓夫・下島泰子・柄本健太郎・時任隼平・奈須正裕・長谷川友香・花井渉・松尾直博・三河内彰子・無藤隆・文部科学省初等中等教育局教育課程課：「OECD Learning Compass 2030 仮訳」，p. 5，2020.，https://www.oecd.org/content/dam/oecd/en/about/projects/edu/education-2040/concept-notes/OECD_LEARNING_COMPASS_2030_Concept_note_Japanese.pdf（2024. 7. 23 確認）
- 五十嵐亮・丸野俊一：「教室談話における『発言相互の繋がり』を可視化する分析方法の開発と適用」，日本教育工学会論文誌 32 (1)，pp. 89-98，2008.
- 石井順治：学び合う学びが生まれるとき，世織書房，2004.
- 白井俊：OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来—エージェンシー、資質・能力とカリキュラム—、ミネルヴァ書房，p. 146，2020.
- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会生活・総合的な学習の時間ワーキンググループ：「第8回 配付資料 生活・総合的な学習の時間ワーキンググループ議論のまとめ（たたき台・イメージ）〔総合的な学習の時間〕（平成28年5月30日）」、2016.https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/064/siryo/attach/1375568.htm（2024. 4. 12 確認）
- 藤井千春：「協働的な学習」，日本生活科・総合的学習教育学会編，生活科・総合的学習辞典，溪水社，p. 29，2020.
- 藤上真弓：「総合的な学習の時間における協働の質をとらえる視点の開発」，山口大学教育学部論叢第72巻，p. 79，p. 83，p. 86，pp. 89-90，p. 90，pp. 90-91，p. 91，2023.
- 藤上真弓：「総合的な学習の時間における質の高い協働で用いられる言葉の具体化～分かり合おうとするために必要な言葉に着目して～」，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第57号，pp. 141-150，2024
- 丸野俊一・加藤和生・富田英司・稲田八穂・北川尊士・田頭美幸・牧野生次郎・山下恵子・樫村和子：「教師が暗黙に想定しているディスカッションスキルの理想的な発達段階モデル」，教師の「ディスカッション教育」技能の開発と教育支援システム作り（平成14年度～平成16年度科学研究費補助金（基盤研究（A）（2））研究成果報告書，p. 15，2005.
- 文部科学省：小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総合的な学習の時間編，東洋館出版社，p. 8，p. 9，2018.
- 山本耕祐・若松美沙・若松昭彦：「小学校低学年における学級集団への参画に関する解釈的分析—学級活動「話し合い活動」での児童の発話に着目して—」，初等教育カリキュラム研究第8号，初等教育カリキュラム学会，p. 62，2020.
- 渡邊満・岡本義裕：「『総合的な学習の時間』における『話し合い活動』の意義と活性化の方略に関する研究—ハーバマス，J. の『コミュニケース的行為理論』を基盤にして—」，兵庫教育大学研究紀要第29巻，p. 2，2006.
- OECD：「OECD Learning Compass Concept Notes」，2019.，https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD_Learning_Compass_2030_concept_note.pdf（2021. 9. 9 確認）
- Batson, C. D.: Altruism in humans. Oxford, Oxford University Press. 2011.（菊池章夫・二宮克美訳：利他性の人間学 実験社会心理学からの回答，新曜社，2012）
- Neil Mercer：「Three kinds of talk.」，Think-ing Together Resources、University of Cambridge.，https://thinkingtogether.educ.cam.ac.uk/resources/5_examples_of_talk_in_groups.pdf（2022. 5. 24 確認）を藤上が訳，2008.